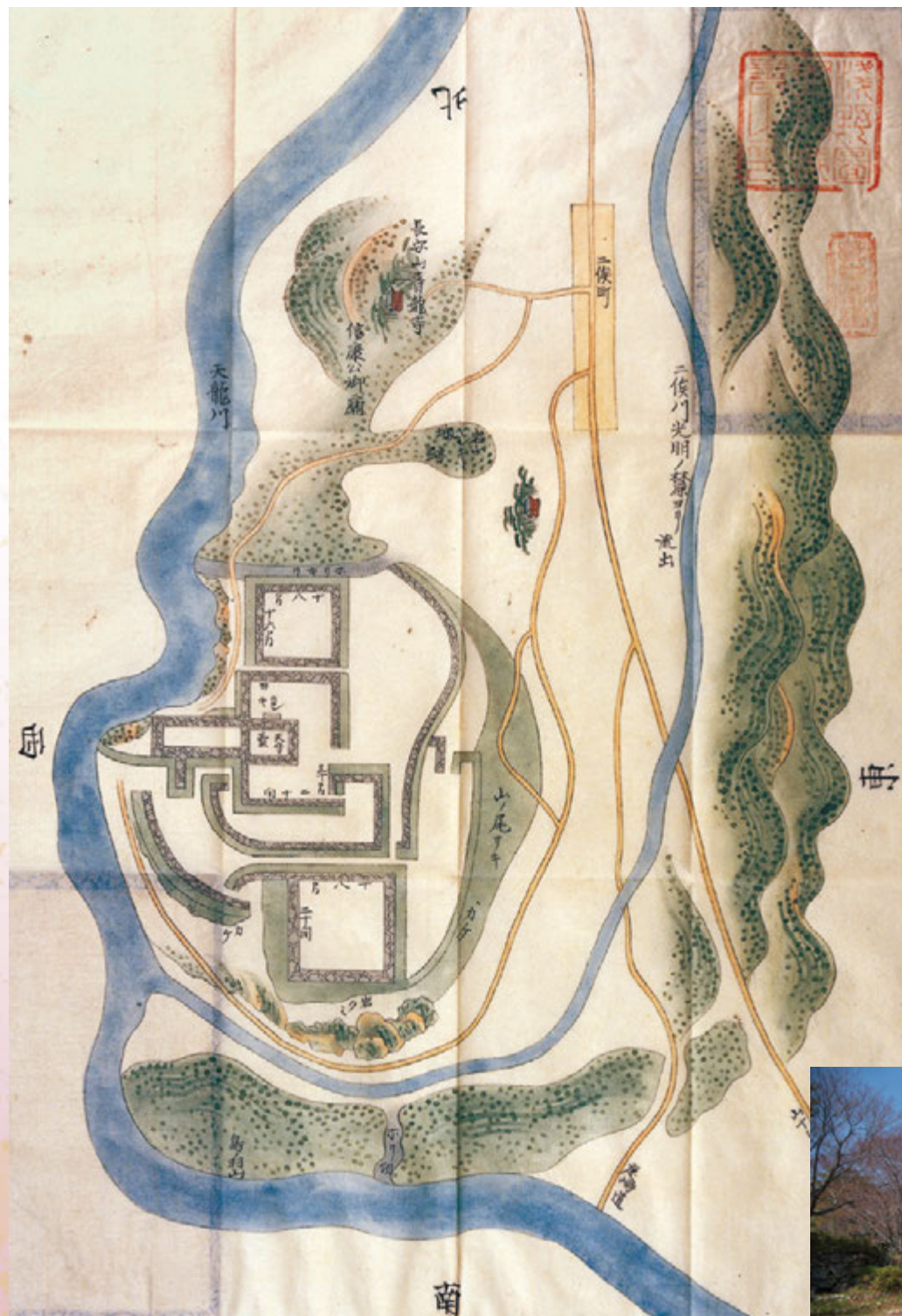


歴史万華鏡

天竜川の下流平野を見下ろす二つの山城。かつて、二俣城と鳥羽山城は「別城一郭」という二つで一つの「対の城」として、独自の機能を発揮した。遠州の要衝を扼する両城を領有したのは、今川、徳川、武田、豊臣という名だたる戦国武将たち。ここを舞台に繰り広げられた覇権争いの歴史を振り返ってみよう。

● 二俣城跡



● 鳥羽山城跡



「別城一郭」の面影残す

二俣城跡、鳥羽山城跡

浜松市3番目の国指定史跡に認定

一体として運用する築城方式。浜松市天竜区にある二俣城と鳥羽山城の場合、二俣城が深い濠と天守を設けた軍事要塞、鳥羽山城が幅広い道や庭園を設けた迎賓館として用いられた。右ページの絵図(「諸国古城之図」のうちの二俣城絵図、広島市立中央図書館所蔵)に描かれているように、二つの城は旧二俣川をはさんで南北に向かい合っている。両城跡は、戦国時代の城郭の姿を具体的に伝える貴重な歴史遺産として、このほど浜松市としては3番目の国指定史跡に認定された。

さて、このような形態の城はどのような歴史的経緯から生まれたのか。そもそもは戦国時代の初期(16世紀初頭)、今川氏が現在の天竜区役所周辺に築いた二俣古城(笹岡城)が始まりとされている。その後、遠江を巡る今川、武田、徳川の勢力争いが激化し、永禄3年(1560年)の桶狭間の戦い後は、軍事的強化のため天竜川と旧二俣川が合流する北側の小山に二俣城、その対岸に鳥羽山城が築かれた。

永禄11年(1568年)、三河から遠江に侵攻した徳川家康は、今川方が守る二俣城を攻略。しかし、元亀3年(1572年)、遠江・三河侵攻作戦を開始した武田信玄によつて二俣城は奪い取られた。この後の三方ヶ原の戦いで家康は信玄に大敗するが、直後に信玄が病で死去すると、家康は直ちに二俣城奪還に乗り出す。天正3年(1575年)、7カ月に渡る攻城戦の末、二俣城は再び家康の手に落ちたのだ。これにより家康の遠州支配は盤石なものとなったが、その数年後、二俣城に思わぬ悲劇が訪れた。

「信康自刃」という悲劇の舞台に

天正7年(1579年)7月、家康の同盟者・織田信長の下に

1通の書状が届く。その内容は「家康の正室・築山殿と嫡男・信康が武田勝頼に内通している」という衝撃的なものだった。これを重く見た信長は、家康に両名の処断を求める。家康は悩んだ末、同年8月に築山殿を佐鳴湖畔で殺害。9月には二俣城に幽閉していた信康に切腹を命じた。この時、介錯人には服部半蔵(正成)が選ばれたが、主筋の信康に対して半蔵はどうしても刃を振り下ろせない。それを見かねて、検視役の天方道綱が半蔵に代わって介錯したと伝えられている。

数え21歳の若さで自刃した信康は、本当に武田と内通していたのか。諸説あつて真相は定かではない。ただ、信康は長篠の戦いなど武田との戦で数々の武功を挙げ、



▲ 天守台からは天竜川が見下ろせる



▲ 二俣城本丸の天守台



▲ 清瀧寺にある「信康廟」(通常は非公開)

父・家康の遠州平定を大いに助けた。家康は信康の菩提を弔うため、二俣に「信康山長安院清瀧寺」を建立。寺域には、その遺骸を納めた「信康廟」も設けられている。また、二俣の人々は信康を「悲運の武将」「文武両道の若武者」として今も慕い、地元有志が命日などに廟を参拝している。

豊臣家臣の入城で城は変貌

信康の悲劇から11年後の天正18年（1590年）、天下統一を成し遂げた豊

臣秀吉の命により、家康は関東へ移封となる。これに伴って、豊臣家重臣の堀尾吉晴が浜松城主となり、支城である二俣城には吉晴の弟の宗光が入城した。当時の二俣城は、幾重にも土塁を巡らせ、軍事に特化した実用一辺倒の砦。複数の曲輪が階段状に配置され、防御用の堀切がいくつも設けられていたが、城としての威風を示す石垣などはなかった。川をはさんで対面する鳥羽山城も、同様の中世的な山城だ。

こうした城の素朴な姿は、大阪城などの絢爛豪華な城を見慣れている宗光にとって、決して満足のいくものではなかっただろう。「城は、ただ守りが堅固だけではいけない。城主の権威や権力を示す威厳ある姿が必要だ。また、城を訪れる賓客をもてなすための居館もほしい」。そのような機能を実現するために行われたのが、二俣、鳥羽山の両城を「別城一郭」とする改修工事だった。

まず二俣城については、本丸となる中心曲輪に石垣づくりの天守台を設置。高さ5メートルの台の上には天守閣が設けられ、眼下の天竜川を行き交う船上から、その姿がよく見えたのではないかと想像される。一方、鳥羽山城には幅6メートルを超える広々とした大手道（大手門へ至る道）が整備され、これは信長の安土城大手道にも匹敵する道幅だったという。また、本丸内には岩を巧みに配置した枯山水風の庭園と、迎賓館とみられる建物があったことが発掘調査で確認されている。

こうして近世的な城郭に生まれ変わった二俣、鳥羽山の両城だったが、やがて、その役目を終える時が訪れる。関ヶ原の戦い後の慶長5年（1600年）11月、堀尾氏は出雲に転封され、両城は徳川の所領に復帰した。しかし、天下の趨勢はすでに徳川支配であり、もはや他国からの北遠侵攻を恐れる必要はない。このため両城はその戦略的価値を失い、間もなく廃城となったが、貴重な歴史遺産としては今も高く評価されている。現在、二つの城跡は公園として整備され、名だたる武将たちが争奪戦を繰り広げた往時を偲ぶことができる。



▲ かつては旧二俣川が流れていた二俣市街



▲ 鳥羽山城跡に今も残る枯山水風の庭園遺構

二俣城跡
鳥羽山城跡